

## 策定にあたって

“神戸”と聞いて多くの人が最初にイメージするのは、山と海に代表される豊かな自然に恵まれた美しいまちなみではないでしょうか。しかし緑あふれる六甲山は、昔から変わらず今のような姿であったわけではありません。江戸時代から明治のはじめにかけて、人々の生活や産業利用のための伐採などにより六甲山はほとんど草木の生えていない荒れ果てた山となっていました。土砂災害などの危険から神戸のまちを守り、市民の命をつなぐ水源を確保するため、100年あまり前から人々の緑を取り戻すための努力が営々と続けられ、その結果、多くの人に愛される「市民の宝」とも言うべき現在の六甲山になったのです。

このことに象徴されるように、神戸のまちは、すべての市民が力を合わせて築き上げてきたものです。神戸港を中心に国際港都として発展してきた神戸の歴史は、その一方で、戦災、風水害、そして震災など、多くの困難に直面し、そのたびに一人ひとりの市民がお互いに助け合って、力強く乗り越えてきた歴史でもあります。1995年の阪神・淡路大震災から16年が経過し、震災を経験していない市民も増えてきていますが、震災を契機に生まれた「絆」の輝きは、今なお少しも色あせることなく、神戸のまちを照らし続けています。

この「神戸づくりの指針」は、少子・超高齢化の急速な進行や、激しさを増す国際競争など、さまざまな課題が山積する時代にあって、神戸のこれまでの歩みをふまえ、これからの神戸のまちづくりがいかにあるべきかを、各界の叡智を結集して議論する中で生み出されたものです。これからの神戸にとって最も大切なのは「ひと」であり、多様な「ひと」が集まり、活躍できるまちをつくる。それによって、「ひと」を「たから」として新たな豊かさをともに創造する—それが、協働と参画をさらに発展的に進めた“協創”の理念であり、「神戸づくりの指針」全体をつらぬくこれからのまちづくりの姿です。

今から800年あまり前に都（福原京）を開いた平清盛、あるいは幕末の海軍操練所を舞台に活躍した勝海舟や坂本龍馬など、神戸にゆかりのある数多の先人たちは、眼前に広がる海を見渡しながら、遙かなる異国に思いを馳せ、わが国のさらなる発展を期していたことでしょう。日本、そして神戸をとりまく社会経済状況は厳しさを増していますが、一方で、神戸ならではの創造性を発揮して新たな豊かさを創造するチャンスでもあります。今こそ神戸から世界に飛躍した先人たちの歩みに学びつつ、この「神戸づくりの指針」、そして“協創”の理念のもと、これまで以上に魅力あふれる神戸のまちをともにつくっていきましょう。

平成23年2月



神戸市長

矢田 立 郎